

共生

国内そして世界の共生を求めて

——平和の基本原理再考（要旨）

イブラヒム・バジュニド

本稿で取り上げたのは、戦争と平和、革命と改革の歴史的ルーツであり、波乱に満ちた人類史の中の共生の追求である。平和的共生の諸原理を再考し、再吟味して、一国内での共生だけでなく国家間の共生の意味についても、そのニュアンスを探究した。特に、「ナシヨナル・アイデンティティと愛国主義（パトリオティズム）の追求」とか、人間は、皮膚の色ではなく人格の中心によって判断される」との理想を掲げる「地球市民」といった概念に即して考察した。超大国間の敵対

関係を緩和するアイデアについて検討し、世界革命を目指して競合する敵対者たち——彼らは自国の労働者による「国内革命」を通じて、あるいはイデオロギーの輸出や布教、宗教的イデオロギーを通じて、それを成し遂げようとする——の相互の猜疑心と不安を和らげるアイデアを検討した。

さらに本稿は、現在の文明に見られる痛ましい悲劇を指摘した。その悲劇とは、本意な共住と不寛容が恒常的な衝突を生み、それぞれの集団が相手を難民と

して追放しようとしたり、大虐殺を行ったり、ひとつの集団が完全に支配権を握って、少数派のほうの集団を「違うやつら (others)」などとして人間扱いしなかつたりすることである。

「デジタル時代の共生」へ 「世界カリキュラム」を

そして本稿が提言するのは「世界カリキュラム (world curriculum)」である。これは、説得力のある包括的かつ人間性 (humanity) に基づいた世界観を作り上げ、互いの共通性を見出して、偽善や過激思想に立ち向かいつつ、高い道德的基盤を築き、効果的な意思疎通の道を生み出すものである。このカリキュラムが、変革力ある平和教育をもたらし、その教育が「デジタル時代の共生」をはぐくむはずである。

本稿はさらに次のことに論及する。さまざまな市民社会団体ならびに（市民による政策提言や社会的弱者擁護への支援を行う）アドボカシー・アドバイザーの役割を拡大して、他者への偏見を減らすプログラムの担い手

とすること、根本問題の解決のためのグローバルスキルの活用を拡大すること、個人同士の友情と絆を育成して、互いに対して建設的に向き合うことを可能にすること、などである。

共生という目標を打ち立て、支え続けていくためには、十分な数の現在・将来の指導者が、そして十分なだけ多数のあらゆる社会と国の人々が、ともに全地球的視野をもち、異文化を理解する能力をもたねばならないのである。

(Ibrahim Rajiud / ローリエイト国際大学副総長補)